

# 「なさすぎ」などにみられる剰余的な要素「さ」：

## 「さ」の使用における揺れについて

澤田久美子（国際理解教育領域）

A Surplus suffixal element “-sa” observed as in “nasasugi” and the factor in its use

Kumiko Sawada

### 第1章 研究の目的

形容詞「ない」や否定の接辞「ない」に、補助動詞「すぎる」や様態の接辞「そうだ」が後続するとき、「なさすぎる」、「なさそうだ」と「さ」が使用されることがある。

この「さ」は使用されることもあればされないこともあり、その有無によって文の意味に変化をもたらさない。意味の変化をもたらさず、文法的役割も担わない、この「さ」を剰余的接尾辞「さ」と呼ぶことにする。

剰余的接尾辞「さ」については、辞書や文法書に説明がなく、使用状況にも揺れがあるが、使用状況の揺れにはある一定の傾向があるように思われる。

本論文では剰余的接尾辞「さ」がどんな状況でよく使われ、あるいは使われないのかを調査・分析する。

様態の接辞「そうだ」の否定形の意味の差について菊池（2000）の研究があり、剰余的接尾辞「さ」の使用・不使用に関して言及している研究に、豊田（1998）と野田（2003）がある。

形容詞「ない」や否定の接辞「ない」に、補助動詞「すぎる」が後続するときの剰余的接尾辞「さ」に関しては、先行研究は存在しない。

豊田は小説や新聞からの用例調査を行い、それぞれの否定形式の使われ方を述べている。形容詞に「ない」「そうだ」が続く場合について、以下のようにまとめている。

非存在の「ない」（例：問題がない）、「面白い」のような一般的な形容詞は「なさそう」

で安定している。「すまない」のように「ない」がついて形容詞の働きをする語は「なさそう・なそう」と揺れる。この揺れについて、「すまない」を「すむ」と「ない」の2語とみると「ない」が「なさ」になり、「すまなさそうだ」になり、「すまない」を1語の形容詞とみると「すまない」+「そうだ」が「すまなそうだ」となる。

動詞に接続する形については「そうに（も）ない」が大勢であるが、「なさそう、なそう」という形も使われるとして、「降らない」を2語として扱い、『「降る」+「ない」+「そうだ」』の場合は「降らなさそうだ」となり、「降らない」を1語の形容詞のように扱い、『「降らない」+「そうだ」』の場合は「降らなそうだ」となると述べている。

動詞に接続する場合の「な（さ）そうだ」と「そうに（も）ない」の使い分けについては、①「なさそうだ」の形が優勢な場合、②どちらも同じように使われる場合、③「そうにない」が優勢な場合の3つにわけ、次のように述べている。

①、②、③は、文の内容によって分かれるようである。これらは推測という意味では同じであるが、①は、眼前の様子をそれがどのような理由によって生じたかを述べるものであり、③は、これから起こることを予測する内容である。②の文は、③のようにこれから起こることを予測するようであるが「この様子だと」と眼前のことを述べる表現も交じる。

本論文では、様態の接辞「そうだ」の否定形だけでなく、形容詞「ない」及び、否定の接辞「ない」に補助動詞「すぎる」が後続する場合も扱い、剩余的接尾辞「さ」の使用に揺れが見られる2つの場面で、使用傾向をそれぞれ調査し、さらにその2つの場面を比較検討する。

## 第2章 剩余的接尾辞「さ」

剩余的接尾辞「さ」は名詞化の接尾辞「さ」とは異なり、意味も文法的役割ももたない。

剩余的接尾辞「さ」が使用されうる状況は、以下の通りである。

【表 2.1 剩余的接尾辞「さ」が使用されうる状況】

	+すぎる	+そうだ
ない	なさすぎる	なさそうだ
良い	*良さすぎる	良さそうだ
濃い	*濃さすぎる	*濃さそうだ

※\*非文法的であるという意味。

本論文では剩余的接尾辞「さ」の使用に揺れが見られる「ない」+補助動詞「すぎる」、「ない」+様態の接辞「そうだ」について考察する。

## 第3章 調査方法

剩余的接尾辞「さ」の使用状況について、書き言葉を対象に調査した。データ抽出に使用したコーパスは以下のとおりである。

国立国語研究所の「現代日本語書き言葉均衡コーパス」より1から4の4種類。

1. 書籍 約1,300万語 (4,669サンプル)
  2. 白書 約500万語 (1,500サンプル)
  3. Yahoo!知恵袋 約500万語 (45,725サンプル) \*以下「Yahoo!」
  4. 国会議事録 約500万語 (159サンプル)
  5. 朝日新聞の新聞記事データ (記事約550万件) \*以下「現代新聞記事」
  6. 1910年～1964年までの新聞切抜資料 (記事約50万件) \*以下「戦前新聞記事」
- これら6種類のコーパスから、剩余的接尾辞

が使用されうる状況を全て抽出し、そこで剩余的接尾辞「さ」が使用されている割合を調査した。

様態の接辞「そうだ」の否定形には「なさそうだ」「なそうだ」(以降「な(さ)そうだ」)以外に、余的接尾辞「さ」の使用の余地のない形態である「そうにない」「そうもない」「そうにもない」(以降「そう(に・も・にも)ない」)がある。第4章では「な(さ)そうだ」のみをとりあげ、剩余的接尾辞「さ」の使用を調査する。その後、第6章で「そう(に・も・にも)ない」「な(さ)そうだ」について、言及する。

## 第4章 先行する単語と剩余的接尾辞「さ」の使用

### 4.1 剩余的接尾辞「さ」が必ず使用される状況

名詞+形容詞「ない」、形容動詞及び形容詞+否定の接辞「ない」に、補助動詞「すぎる」、様態の接辞「そうだ」が後続するとき、戦前新聞記事の5例を除いた、8073例で剩余的接尾辞「さ」が使用されていた。現代のデータでは100%剩余的接尾辞「さ」を使用している。

### 4.2 剩余的接尾辞「さ」の使用に揺れが見られる状況

#### 4.2.1 語幹が「な」で終わる形容詞および連語に後続する状況

本論文では語幹が「な」で終わる形容詞と、動詞+否定の接辞「ない」で構成された連語が先行する場合を、あわせて考察した。

語幹が「な」で終わる形容詞や連語に補助動詞「すぎる」、様態の接辞「そうだ」接辞が後続する場合、剩余的接尾辞「さ」の使用に揺れがみられた。その形容詞に否定の意味があると、形容詞「ない」や否定の接辞「ない」との混同が起こり、剩余的接尾辞「さ」の使用が起こる

のではないかと考え、調査した。

語幹が「な」で終わる形容詞を、『大辞泉 増補・新装版 (デジタル大辞泉)』を参考に、否定の意味の有無分類し、剰余的接尾辞「さ」の使用傾向を調査した。

否定の意味がある語は補助動詞「すぎる」が後続するときも、様態の接辞「そうだ」が後続するときも共に、「さ」を使用する割合が79%、70%と高く、否定の意味がない語は29%、17%と低かった。よって語幹が「な」で終わる形容詞及び、動詞+否定の接辞「ない」で構成された連語に補助動詞「すぎる」、様態の接辞「そうだ」が後続するとき、剰余的接尾辞「さ」が使用されるかどうかは、その単語が否定の意味を持っているかが影響している可能性が高いといえる。

#### 4.2.2. 動詞に後続する状況

動詞+接辞「ない」に「すぎる」、「そうだ」が後続したするとき剰余的接尾辞「さ」の使用にかなりの揺れが見られた。コーパスから抽出した使用例を分析すると、以下の事が明らかとなった。

1. 否定の接辞「ない」が後続するとき語幹が一音節になる動詞に、否定の接辞「ない」+補助動詞「すぎる」が後続するとき、剰余的接尾辞「さ」を使用する傾向がある。
2. 動詞の可能形に否定の接辞「ない」+補助動詞「すぎる」及び様態の接辞「そうだ」が後続するとき、剰余的接尾辞「さ」を使用する傾向がある。
3. 動詞の受身形に否定の接辞「ない」+補助動詞「すぎる」が後続するとき、剰余的接尾辞「さ」を使用する傾向がある。
4. 動詞のテイル形に否定の接辞「ない」+様態の接辞「そうだ」が後続するとき、剰余的接尾辞「さ」を使用する傾向がある。

5. 下一段動詞に否定の接辞「ない」+補助動詞「すぎる」及び様態の接辞「そうだ」が後続するとき、剰余的接尾辞「さ」を使用する傾向がある。

### 第5章 各コーパスにおける剰余的接尾辞「さ」の使用傾向

この章では、6種類のコーパスと剰余的接尾辞「さ」の使用傾向を調査し、以下の2点が明らかになった。

1. 単語に否定の接辞「ない」+補助動詞「すぎる」が後続するとき、文体があまりフォーマルでない「Yahoo!」、「書籍」では、文体がフォーマルな「国会議事録」、「現代新聞記事」よりも剰余的接尾辞「さ」が使用される傾向がある。
2. 単語に否定の接辞「ない」+補助動詞「すぎる」が後続するとき、「戦前新聞記事」と「現代新聞記事」を比較すると、「戦前新聞記事」のほうが、剰余的接尾辞「さ」が使用される傾向にある。

### 第6章 様態の接辞「そうだ」の否定形、「な(さ) そうだ」と「そう(に・も・にも)ない」

形容詞「ない」及び否定の接辞「ない」に様態の接辞「そうだ」が後続するとき、「な(さ) そうだ」「そう(に・も・にも)ない」の形をとる。剰余的接尾辞「さ」を使用しうる「な(さ) そうだ」と、剰余的接尾辞「さ」を使用する余地のない「そう(に・も・にも)ない」の選択傾向について調査し、以下の2点が明らかとなった。

1. 文体があまりフォーマルでない「Yahoo!」「書籍」では、文体がフォーマルな「国会議事録」、「現代新聞記事」よりも「な(さ) そうだ」を選択する傾向がある。
2. 現代と戦前の新聞記事を比較してみると、現

代の新聞記事のほうが「な（さ） そうだ」を選択する傾向がある。

## 第7章 剰余的接尾辞「さ」が使用されうる文法的状況

形容詞「ない」及び否定の接辞「ない」に補助動詞「すぎる」、様態の接辞「そうだ」が後続するとき、剰余的接尾辞「さ」が使用され、それ以外のときは使用されない要因はなにか、補助動詞や接辞が後続したときの、形容詞「ない」及び否定の接辞「ない」の活用に注目して考察した。

補助動詞「すぎる」、様態の接辞「そうだ」様態の接辞「げ」<sup>1</sup>以外に、形容詞「ない」、否定の接辞「ない」に接続するしたとき、「ない」の活用が語幹のみになる、補助動詞、接辞はない。このことから「ない」の活用が語幹のみになり、補助動詞や接辞が接続するとき、剰余的接尾辞「さ」が使われる可能性があるということが出来る。

## 第8章 結論

名詞+形容詞「ない」、形容動詞+否定の接辞「ない」、形容詞+否定の接辞「ない」に補助動詞「すぎる」及び、様態の接辞「そうだ」が後続するとき、剰余的接尾辞「さ」は使用される。

語幹が「な」で終わる形容詞及び、動詞+否定の接辞「ない」で構成された連語に補助動詞「すぎる」、様態の接辞「そうだ」が後続するとき、剰余的接尾辞「さ」が付加されるかどうかは、その単語が否定の意味を持っているかどうかの影響している可能性が高い。

動詞+否定の接辞「ない」に補助動詞「すぎ

る」、様態の接辞「そうだ」が後続するとき、以下の4点が明らかになった。

1. 動詞の可能形に否定の接辞「ない」+補助動詞「すぎる」及び様態の接辞「そうだ」が後続するとき、剰余的接尾辞「さ」を使用する傾向がある。
2. 動詞の受身形に否定の接辞「ない」+補助動詞「すぎる」が後続するとき、剰余的接尾辞「さ」を使用する傾向がある。
3. 動詞のテイル形に否定の接辞「ない」+様態の接辞「そうだ」が後続するとき、剰余的接尾辞「さ」を使用する傾向がある。
4. 下一段動詞に否定の接辞「ない」+補助動詞「すぎる」及び様態の接辞「そうだ」が後続するとき、剰余的接尾辞「さ」を使用する傾向がある。

剰余的接尾辞「さ」が使用されうる文法的状況について、補助動詞や接辞が「ない」接続するとき、「ない」の活用が語幹のみになる状況で、剰余的接尾辞「さ」が使われる可能性があるということが出来る。

### 【参考文献】

- 庵功雄他(2000)『初級を教える人のための日本語文法ハンドブック』スリーエーネットワーク
- 菊地康人(2000)「いわゆる様態の『そうだ』の基本的意味 - あわせて、その否定各形の意味の差について - 」『日本語教育』107号, pp. 16 - 25. 日本語教育学会
- 豊田豊子(1998)「『そうだ』の否定の形」『日本語教育』97号, pp. 60 - 71. 日本語教育学会
- 野田春美(2003)「様態の『そうだ』の否定形の選択傾向」『日本語文法』3巻2号, pp. 131 - 145. 日本語文法学会

---

<sup>1</sup>様態の接辞「げ」:「楽しげ」と形容詞の語幹に接続し、若年層の話し言葉では、形容詞「ない」及び否定の接辞「ない」、形容詞「良い」にも接続し、その場合は「なさげ」、「良さげ」と剰余的接尾辞「さ」が使用される。